

— 書 評 —

小笠原欣幸著 晃洋書房

『台湾総統選挙』

(NHK国際放送局) 山田 賢一

台湾で「神人級学者」とも呼ばれる、日本における台湾選挙分析の第一人者が、過去6回にわたる台湾総統直接選挙の内容紹介を通じて台湾人の自己認識の変遷を明らかにした好著である。一方、著者の小笠原氏に関しては、その正確無比な選挙予測もさることながら、根っからの台湾ウォッチャーではなかったということにもある種の驚きを覚える。「あとがき」によると、著者はもともとイギリス政治を専攻し、ハロルド・ラスキに関する著作などもあるのだが、東アジアの政治を少しは知っておきたいと思い、民主化した台湾が頭に浮かんだという。しかしそれだけで35歳の時に「まずは台湾に滞在してみよう」と思い立ち、中国語も一から勉強することにした」のだから、著者の果敢な行動力には頭が下がる。そして著者の研究の特に優れたところは、「台湾の田舎の村にまで入り込む徹底したフィールドワーク」と、「投票結果の精密なデータ解析」の結合で、議論の説得力を高めていることだ。

著者の結論（と評者が認識している内容だが）を先に言ってしまうと、台湾では過去6回の総統直接選挙を通じて、有権者の間に台湾という土地を自らのアイデンティティのよりどころとする考えが次第に深まり、従来主流だった「中国ナショナリズム」とも、またその対極にある「台湾ナショナリズム」とも異なる「台湾アイデンティティ」という中間的なイデオロギーないし政治的立場というものが形成された、ということである。「台湾」アイデンティティという以上、どちらかといえば台湾ナショナリズムに近いともいえるが、中国からの統一圧力に常にさらされる台湾人が、「自立」と「繁栄」のバランスに苦心する中で生み出され

た知恵ということだろう。この台湾アイデンティティや台湾の選挙事情について知るうえで欠かせないのが、「族群＝エスニック・グループ」意識である。台湾では、元々島で暮らしていたアミ族・タイヤル族・パイワン族などの「原住民」（台湾では、「先住民」という言葉は、すでに滅亡した民族というニュアンスがあるため使わない）が人口の約2%、第二次大戦終了より前に中国本土から台湾に移住した人のうち、福建系の「ホーロー人」（閩南人とも言うが、「閩」の字に差別意識が感じられるとの声もあり、最近はホーロー＝河洛もしくは福佬を使うことが多い）が70%強、同じく中国本土からの移住者で、漢民族の中で独自の言語を持つ客家人が13%強、第二次大戦終了後に中国大陆から渡来した「外省人」が約13%を占めるとされている。そしてこのうち外省人以外をまとめて「本省人」と呼ぶが、本省人として通常頭に浮かぶのはホーローと客家である。台湾では長らく外省人と本省人の対立を示す「省籍矛盾」という言葉が使われてきたが、これは蒋介石政権の時代に、少数派の外省人が多数派の本省人を力で支配したことが背景にある。しかし省籍矛盾が単純な「外省人VS本省人」という関係であれば、外省人を支持基盤とする国民党は民主化と共に与党から転落するわけで、実際にははるかに複雑である。ホーローと客家の間では外省人が渡来する以前から様々な摩擦があり、蒋介石の国民党政権もそれを利用してむしろ客家や原住民を支持基盤に組み込んでいた。ではこうした基本情報をもとに『台湾総統選挙』を見ていこう。

本著は序章で、台湾政治の概略説明を行い、「事実上の国家」とされる台湾の位置づけや権威主義体制の歴史、蔣経国から李登輝時代にかけて進められた民主化、「藍」と「緑」（藍は国民党の旗の色で、緑は民進党の旗の色である。「藍」は国民党やそれに近い政党、政治勢力を指し、ベースは中華意識が強い保守勢力。一方「緑」は民進党や

それに近い政党、政治勢力を指し、ベースは台湾意識が強いリベラル勢力)の二大陣営による対立構造などを概観している。その後第1章で総統選挙の争点として、内部・外部双方の要素を挙げ、外部要素としては中国・アメリカ・米中の駆け引き・日本について触れている。そして第2章から第7章までを過去6回の総統直接選挙の記述にあてて、終章で全体のまとめをしている。何といっても興味深いのは具体的な選挙の事例なので、総統選挙に限らず、個別のケースを紹介していきたい。

まずは第1章で出てくる、1994年の台北市長選挙である。この時の候補者は与党国民党が現職の黄大洲、最大野党民進党が陳水扁、国民党から飛び出した外省人を中心とする新党が趙少康だったが、なんと立法院で過半数を有する国民党の黄大洲が大差で3位に終わったのである。これは台湾の選挙が単純な政党イデオロギーだけで説明できない典型的な事例だが、著者は評者が先に述べた「族群意識」で解説する。候補者のうち趙少康は外省人で他の2人は本省人だが、この選挙では趙が外省人の支持者を動員して当時の李登輝総統(本省人)や陳水扁候補を非難したことから、本省人の危機感を喚起したという(25ページ)。外省人対本省人という二極対立が強く意識されると、その双方から支持を集めてきた国民党は相対的に不利となり、結局は陳43.7%、趙30.2%、黄25.9%の結果となった。外省人の人口比率が高い台北市は本来国民党の金城湯池のはずだが、国民党の内部分裂によって民進党が漁夫の利を得た。ちなみに評者は記者としてこの選挙取材していたが、趙のポスターに、鼻の下に「ヒトラーひげ」を書く位ずらをしたものを見つけ、趙に対する危惧の強さに少々驚いた記憶がある。また、評者が著者のフィールドワークを評価する背景に、選挙現場の雰囲気を感じることの重要性がある。当該選挙で評者が各候補の選挙事務所を訪れた際、

陳の事務所と黄の事務所の盛り上がり度は天と地ほどの差があった。当時は「国民党は、最後はお金をばらまいて勝つ」という神話もあったため、「1位陳,2位黄,3位趙」という報告を挙げたのだが、「現場の雰囲気は重要」ということを再認識させられた。また、この後の選挙でもそうだが、台湾の選挙では「棄保」(誰かを棄てて、誰かを守るという意味)という現象が頻繁に見られる。もともと国民党を支持していた人が、黄が弱そうだと気づいたとき、陳と趙のどちらがマシか考え、マシと思われる方に投票するというものである。その際、本省人特にホーローの国民党支持者は、「政党イデオロギー」で近い方を選ぶと趙になるが、「省籍矛盾」で選ぶと陳になるのだ。

そしてこの「棄保」は2000年の総統選挙でも再現したことを著者は示す。最終得票率は民進党の陳水扁が39.3%、国民党を飛び出し無所属で戦った外省人の宋楚瑜が36.8%、国民党公認の連戦が23.1%と、ここでも与党候補が大差の3位に沈んだ。著者は「宋楚瑜に追い風が吹いて、国民党の支持者の中で『連を捨てて宋を守る』の流れが発生した。宋の激しい追い上げを見て、外省人を嫌う本省人が『連を捨てて陳を守る』の投票行動を取った」(30ページ)と評している。その一方で著者は、「民主化後の台湾社会の多元化、そして多文化主義の拡大によって、族群の要素は低下しつつある。2008年に外省人である馬英九が当選したことはそれを示す事例といえる」と述べ、族群をもとに投票を行う台湾人は減りつつあるとの評価を示している。このことに評者は同感だが、その直後に著者が付け加えた「だが、族群要素がなくなったわけではない」というのも事実で、現状は族群意識が少しずつ時間をかけて溶解する過程にあるといえそうだ。

次に、各政党が総統候補を選出する過程について、本著では58～59ページで触れられているが、国民党・民進党共に細かい方法の変更はあるもの

の、特定の人物が党内で圧倒的な支持を得た場合を除いて「党内予備選挙」を実施している。その際、日本などと大きく異なるのは、党員投票だけでなく「民意調査」という世論調査を実施することである。この方法は、イデオロギー的な二極対立が特徴の台湾政治において、国民党と民進党の双方がより中道的な人物を候補に立てることになる可能性があるという点でメリットがあるように見える。その一方、二極対立を前提として考えた場合、対立する政党の支持者にも発言権を与えるのはリスクでもある。例えば国民党にAとBの2人の候補がいたとしよう。Aが相対的に強く、Bが弱かった場合、民進党支持者は「Bならこちらが勝てる」と考え、故意に「Bを支持する」という可能性があるのだ。この問題は国民党・民進党共にある程度意識していて、民進党は一時、国民党支持と答えた人を計算から外す方法も模索していたが、これも国民党支持者が最初に「民進党支持」と答えると意味がなくなるわけで、結局定着しなかった。

投開票の方法について著者が60ページで説明している内容も面白い。「投票方式は、日本のような候補の名前を書く方式ではなく、候補者名が印刷された投票用紙の規定の欄に選挙委員会のハンコを押す方法である。これは筆跡から投票者が明らかになるかもしれないという不安を抱かせないためであると言われている」「台湾は投票所その場で開票作業が行われるので投票箱の移動がない。これは不正選挙を疑う要因を作らないためのやり方である」。かつて事実上の国民党独裁時代には、選挙をめぐる不正が頻発し、1977年には桃園県長選挙をめぐる「中壢事件」も起きた歴史への反省が生かされている。

次に2004年の総統選挙を見ていこう。この時の選挙は、現職の民進党候補陳水扁と、国民党を中心とする野党の統一候補連戦の一騎打ちとなり、最終得票率は陳50.1%、連49.9%という大接戦で

あった。著者は両者の得票率の差が0.229%としている(159ページ)が、より細かく言うと0.22857%であり、民進党支持者の間では、1947年に本省人が国民党政権の圧政に抗議して全島蜂起した「228事件」の57周年と深読みする向きもあった。この選挙の後に年代テレビが行った族群に関する世論調査が面白い。「我々の社会において、異なる族群間で対立の状況があると思うか?」という質問に対し、「ある」が51.7%、「ない」が36.6%だった。さらに、「ある」と答えた人に、「族群対立の状況は、選挙の期間だけ発生すると思うか、日常生活の中にあると思うか」という質問をしたところ、「選挙の期間だけ」が61.3%、「日常生活の中にある」が36.3%だったという(163ページ)。この結果は、評者が台湾をしばしば訪問した際の皮膚感覚と一致する。つまり、日常生活では族群はあまり意識されないのに、選挙の時になると思いだしてしまい、大なり小なり投票行動に影響するのである。もっともこの時からすでに16年経っており、現在もし同じ調査をしたら族群の影響は低下していると考えられる。また、この選挙では投票日の前日に陳水扁が銃撃されてけがをするという大事件が起きたが、これについてはTVBSが事件前日と当日の夜にそれぞれ世論調査を実施していた。事件前日の夜は連支持が44%で陳支持は34%、一方、事件当日の夜は連支持が39%で陳支持が38%だった(169ページ)。TVBSは国民党よりのテレビ局のため、当時の世論調査の信ぴょう性が十分高いとは言えないのだが、それでも選挙結果に影響した可能性は小さくないだろう。著者はこの事件について、「銃撃事件が発生してから10時間は、両陣営の危機管理能力が問われた時間帯であった」「陳水扁陣営は、……メディアの前で発言すべきことと、すべきではないことをよくわきまえていた」「連戦・宋楚瑜陣営は、……即座の対応が求められている時に延々と会議を開き、内容を十分詰めないで記者会見を行い、

根拠を示さないまま自作自演を示唆する手痛いミスを犯した」(171ページ)と総括している。

続いて、国民党が8年ぶりに政権を奪還する2008年の選挙である。国民党は2005年に連戦が党主席を辞任したのに伴い、後継をめぐる馬英九と王金平が争った。この2人は国民党の二大勢力＝外省人と地方派閥をそれぞれ代表する人物であり、両勢力の力比べの印象もあった。評者は党員選挙の前に台湾の著名な政治学者やメディア人とこの争いについて議論したが、メディア人が馬が有力と述べたのに対し、当時台湾大学教授だったX氏は、「王金平の人脈の広さ」について滔々と語り、王の勝利は疑いないといった風情であった。党員投票の結果は、馬の得票率が73%に達し、この政治学者の票読みのいい加減さにあきれるとともに、「国民党は本質的に外省人の政党」との認識を持った。ところが、馬は総統選挙の候補になると、「台湾化路線」の戦略を取った。ブレンである金溥聰の助言を受けて、台湾各地の民家を3か月にわたって泊まり歩く「ロングステイ」というパフォーマンスを行い、「台北のエリート外省人」という、農村部ではマイナスになるイメージの脱却を図ったのである(191～192ページ)。一方民進党は、台湾独立色を強めたい勢力と中道志向の謝長廷候補の間で摩擦が起き、陳水扁時代の汚職問題などもあって大敗を喫した。

2012年の総統選挙は、国民党現職の馬英九に民進党の蔡英文が挑戦し、台湾初の女性総統が実現するか注目された。この時は、馬が51.22%の票を獲得して快勝したのだが、著者は勝利の要因の一つに「九二共識」(92年コンセンサス)を挙げている。「九二共識」とは、1992年に中台双方の窓口機関の事務折衝で形成されたとされる合意で、中国側はこれを「海峡兩岸が共に一つの中国原則を堅持することをそれぞれが口頭方式で述べる」というコンセンサス(一中原則)ができたと解釈し、国民党は「一つの中国の中身(中華民国

と中華人民共和国)についてそれぞれが口頭方式で述べ合う」というコンセンサス(一中各表)ができたと解釈している(252ページ)。実は「九二共識」という言葉は当時は存在せず、李登輝政権で対中政策担当閣僚を務めた蘇起が2000年になって「発明」した用語である(87ページ)。評者も蘇起が日本で行った講演会で本人から直接耳にしたが、蘇は、2000年に発足した民進党政権は「一つの中国」が嫌いなので、「一中原則」にしろ「一中各表」にしろ、「一中」という言葉を使うのはまずいと考え、民進党でも受け入れやすいようにと「九二共識」という言葉を創造したのだった。しかしそもそも「一中原則」と「一中各表」はそれぞれいいとこ取りの解釈をしたもので(中国側は「一中」を前面に出し、「各表」を語らない。台湾側は「各表」があることが「一中」の大前提と考えている)、真のコンセンサスとは言いにくく、実際1992年当時総統だった李登輝は「そんなコンセンサスは存在しない」と断言している。ともあれ中国の胡錦涛政権は、台湾側の「各表」という解釈に対してコメントせず、正面から否定することはなかったのだから、馬英九政権は「九二共識」＝「一中各表」と宣伝することが可能だった。そして「九二共識」が中国との円満な関係を維持するのに不可欠だとして、蔡英文に対し「九二共識」を認めるよう迫ったのである。しかし蔡がもし「九二共識」を認めれば、多くの台湾人は「一つの中国」を受け入れたとみなし、民進党支持者は蔡にそっぽを向くことになりかねない。著者はこの問題について、「『92年コンセンサス』は、蔡英文の中間路線を阻む楔の役割を持っていた」と評している(253ページ)。

2016年選挙は、2年前に起きた学生たちによる立法院占拠という「ひまわり学生運動」の余韻が残る中で行われ、学生運動を間接的に支援した民進党の蔡英文候補が得票率56.1%で国民党の朱立倫候補に圧勝した。この時は総統選の結果はあら

はじめ見えていた面があり、評者はむしろ同時に行われる立法院選挙に関心を寄せていた。民進党が総統選に勝利した上で立法院でも過半数を獲得すれば、史上初めて行政府・立法府の双方を民進党が掌握することになるためである。著者は立法院選挙では、台北市1区の呉思瑤、新北市1区の呂孫綾、花蓮県選挙区の蕭美琴の民進党3候補に注目したという。それはいずれも国民党の固い地盤で、民進党がどれほど好調でも当選は難しいと思われた選挙区に、若い女性候補が挑戦したからである（282ページ）。実は評者が注目したのもほぼ同じで、呉思瑤・蕭美琴ともう一人は台中市3区に時代力量から出馬した洪慈庸の3人だった。結果は、4人全員が当選、時代が変化する潮流の大きさを感じさせるものとなった。この2016年選挙の結果、台湾は総統が女性になっただけでなく、立法院や行政機関においても女性の存在感が一段と強くなったのである。

総統選挙の投票日前日に起きた周子瑜事件についても触れておこう。これは選挙活動が無事終了した1月15日の夜10時以降、韓国アイドルグループTWICEで活躍する台湾出身の美少女周子瑜（ツウィ）の「謝罪」の映像がテレビやネットで一斉に、そして一晩中繰り返し流されたものである。発端は、周が中華民国の国旗を振るシーンが放映されたことで、これを見た中国のネットユーザーが「台湾独立支持はけしからん」と強く反発して批判が殺到、あわてた韓国のマネジメント会社が周に謝罪させたという顛末だった。周は謝罪ビデオの中で、「海峡兩岸は一つであり、私は中国人であることを誇りに思っています」と弱々しい声で語っていたが、中華民国国旗を振っただけでわずか16歳の少女が中国に謝罪する映像はあまりにも痛々しかった（284ページ）。この事件について著者は、政治的影響は大きい一方、TVBSの世論調査結果も紹介しつつ、事件が選挙に影響を与えたと読み取ることは難しいとの見方を示し

ている。確かに評者もTVBSが言うようにこの事件で50万もの票が動いたとは思えないが、ある種の「ダメ押し」になったように思う。つまり蔡英文が優勢で最終盤を迎えた際、民進党支持者の中に「今回は勝つと決まっているから行かなくてもいい」と思っていた人が周の謝罪ビデオを見て「中国は許せん！」と急遽投票に行った可能性は十分ある。一方国民党支持者の中には、周の謝罪ビデオを見て、「これで最後の望みが絶たれた」と思い、投票に行かなくなった人もいるだろう。従って勝敗を左右することはなかったが、蔡の圧勝を確実にした効果はあったと見る。

終章では、各総統選挙において先述した「台湾アイデンティティ」「中国ナショナリズム」「台湾ナショナリズム」のどのイデオロギーを各候補が取り込んでいたか、あるいは取り込みに失敗したかが分かりやすい図で示されている（319ページ）。また、台湾でよく行われる「あなたは何人ですか？」（中国人・台湾人・中国人かつ台湾人の中から選択）という世論調査への回答の変遷も示され、1992年以降、「中国人」が減って「台湾人」が増えるという流れが分かる（314ページ）。ただここでやや疑問に思ったのは、2014年を境に、「台湾人」の回答が減少傾向にあり、一方で「中国人かつ台湾人」の回答が増加傾向にあることである。同様に、台湾の前途についての世論調査でも、2014年を境に独立志向が低下し、統一志向が上昇している。民進党が総統選挙・立法院選挙で勝利した結果とは矛盾もあり、その理由はよく分からない。また、これが一時的なものなのか、長期トレンドなのかもまだ分からないが、著者の詳細な分析を聞いてみたいところである。

書評者の性として、批判の材料がないかいろいろ探したが、さすがに「神人級学者」の方が何枚も上手であることを自覚させられたので、細かい点のみ指摘することとする。4ページ目に「中国国民党と中国共産党の内戦の結果、敗れた中国国

民党は多くの政府職員、軍人を伴って中国大陆から台湾に逃れた。この時台湾に渡った中国人が外省人である」とあるが、厳密にいうと、1945年の日本の敗戦後に中国大陆から台湾に渡った中国人が外省人である。そうでないと1945年から47年まで台湾省行政長官を務めた陳儀が外省人でなくなってしまう。12ページに蔣経国の発言として「自分も台湾人である」とあるが、通常中国語で言われるのは「我是中国人,也是台湾人」であり、普通に訳すとしたら「私は中国人だが、台湾人でもある」となるはずだ。ただ日本語でこのことが記述される時は「私も台湾人」となっていることが多く、なぜそうなったのかは不明だ。34ページの「小数与党」は「少数与党」が正しい。88ページの「バルブ崩壊」は「バブル崩壊」、また93ページの台湾独立派の組織名称は正式には「台湾独立連盟」ではなく、1970年以降、「台湾独立建国連盟」である。118ページ表3-1に記されている宋楚瑜とペアを組んだ副総統候補は「呂秀蓮」ではなく、「張昭雄」が正しい。137ページの「仮説」は「仮説」である。286ページの図7-5における「新民党」は「親民党」が正しい。

最後に取り上げざるを得ないのは先に行われたばかりの2020年総統選挙だが、本著は発行が2019年11月ということもあり、途中経過も含めて触れていない。しかし、評者は選挙から1か月ほど前にたまたま小笠原氏と懇親会の席で言葉を交わす機会があったので、その時に話した内容を紹介したい。当時すでに総統選挙は現職である民進党の蔡英文候補が国民党の韓国瑜候補をかなり引き離していたので、評者は「総統選挙はまあ民進党として、立法院はどうでしょう?」と聞いた。回答は「接戦で、民進党が過半数を取れるかは微妙だが、今民進党に勢いがある」だった。続いて、評者が4年前も注目した呉思瑤、蕭美琴、洪慈庸の3人について聞くと、「3人とも苦戦している。ただその中で呉思瑤だけは何とか抜け出しそう」

という。花蓮県選挙区については、「花蓮王」とも言われた傅崐萇県長が2018年に株取引をめぐる不正で有罪判決を受け失職したのだが、その直後に傅氏が立法院の選挙に立候補したため、注目を集めていた。そこで「傅は強いのか」と聞くと「圧勝の勢い」との答えだった。そして翌年1月11日の選挙結果はというと、呉思瑤が当選、蕭美琴、洪慈庸の2人は落選、傅崐萇は快勝、民進党は過半数確保である。恐れ入谷の鬼子母神。

(2019年11月刊, 358ページ, 本体2,800円+税)